Bulletin of Toyohashi Junior College
1993, No. 10, 213-224

資料

高昌ウイグル王国の宗教と社会

――中央アジア出土，古代トルコ語仏教文献の識語と施主――

[Juten ODA : "*Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*, von P. Zieme", Translated into Japanese.]

ペーター・ツィーメ 著
小 田 壽 典 訳

訳者はしがき

本稿は，*Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo. Kolophone und Stifter des alttürkischen buddhistischen Schrifttums aus Zentralasien*, von Peter Zieme. ABHANDLUNGEN DER RHEINISCH-WESTFÄLISCHEN AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN, Band 88. Westdeutscher Verlag 1992, 99p. の翻訳である．著者のツィーメ（Dr. sc. phil. Peter Zieme, 1942生）は，フンボルト大学出身で，1965年以来，ドイツ科学アカデミーの東洋学研究所において，かつてドイツ（プロイセン）探検隊が中央アジアで収集した古代トルコ語（ウイグル語）文献資料の解読研究に従事してきた．著書・論文・書評は多数に及び，古代トルコ語文献学の第一人者であり，また仏教・マニ教に造詣が深い．原著は古代トルコ仏教文献学の概論としてもっとも先端の研究成果といってよい．内容は次の通りで順次翻訳の予定である．

内容

序文
ウイグル人の仏教文献
　中央アジア仏教の流れ［ここまで本稿］
　中国語からの翻訳
　疑偽経典
　チベット語からの翻訳
　オリジナル・テキスト
識語
敦煌出土「授記（Vyākaraṇa）」写本の識語
摘要
後書き

追記：原著は Maryam apa（マリヤ姉）と親しまれたガバイン女史（Prof. Dr. Annemarie von Gabain : 1901 年 7 月 4 日生）へ九十歳の誕生日を記念し，ツィーメによって捧げられた．本稿の校正中，女史は 1993 年 1 月 15 日にベルリンで永眠されたとの訃報に接した．私は京都で 1962 年と 1975 年に講義を受け，1981 年の八十歳誕生記念学会（ハンブルグ大学）に招かれ出席した．それ以来昨秋まで抜刷などの郵送をいただき，また拙論のご批評を仰いだ．古代トルコ学の恩師である．ツィーメ博士はベルリン・アカデミーにおけるガバイン女史の古代トルコ学の後継者ともいうべき学究である．

序文

中央アジアの古代トルコ(遊牧)民族の中にあって, ウイグル人は最初にしかも完全に定住生活へ移行した人びとである. 彼らがモンゴリア地方に建てた強力な草原国家は, 840年にキルギス族の攻撃にあって崩壊した. その後ウイグルの人びとは, 新しい生活場所を求めてトルファン・オアシスや河西回廊の甘粛地方に住むようになった.[1] このあたりとタリム盆地全域にかけては, すでに紀元前数百年来, トカラ人, サカ人あるいはソグド人などの, おもにインド・ヨーロッパ語族が定住生活を営み, 小さな国家群を形成していた. タリム地域で諸国家が起こるところは, いつもオアシスのあたりを中心とした. そこでは住民はだいたい農業や園芸作業に従事し, そのために灌漑設備の構築や修繕が生存のもっとも根本的前提であった. このような施設の放置は必然的に耕地の乾燥化や荒廃をまねいた. ほぼ確実に, まず西暦６世紀のなかばから, 証明しうるトルコ族の植民が始まり, その最後の段階としてウイグル人の多数の流入が起こったと考えねばならない. それとともにタリム諸国の発展は, しばしば決定的に, ときどきの程度によるが, 中国人によって「西域」と考えられたこの領域への, 彼らの勢力拡大も与って力があったのである.[2]

文化面についてみると, さまざまな時代に繰り返し, タリム諸国は近隣地帯(中央アジア・北インド・北中国・チベット)や地域内に侵入してきた諸民族から影響を受けた. タリム地域に足跡を残したのは仏教である. シルクロードに沿って仏教はほぼ前１世紀より地歩を占めるようになり, そこから全タリム地域に展開した. しかもタリム地域を経由する通商路によって仏教はその勝利の行進を中国やその他の東アジア地域へ伸ばした. それと並んで空間的にも時間的にも限定されたがタリム地域には, マニ教や(ネストル派)キリスト教の教団が存続していた. これらの古代文化は, 前世紀末より耳目を驚かせたトルファン・敦煌探検隊によって現地で確認され, 膨大な文献類にも多くの文字と言語が使われたことを知るのである.[3]

トルファンと敦煌出土の古代トルコ人の文献遺産は９世紀から 14 世紀の時代に及んでいる. ただし(粛州)東関の1688年のウイグル語『金光明経』写本及びいくつかの甘粛将来断片類は, ずっと後代に避難場所とした後継者たちのものとみなされる.[4]

註

(1) A.v. Gabain, *Das Leben im uigurischen Königreich von Qočo (850-1250)*, Wiesbaden 1973, pp. 118ff. ウイグル草原国家の崩壊による民族移動については, 今のところ, A. G. Maljavkin, *Ujgurskie gosudarstva v IX-XIIvv.*, Novosibirsk 1983 を参照. トルファン王国の成立には, ウイグル族よりもむしろ多く, 他のトルコ系種族が関与したという, 彼の見解については, 高昌の現地から出土したテキストが, もっともはっきりとは「ウイグル賛歌」に, 繰り返し *uyγur ili*(ウイグル国), *on uyγur ili*(十(姓)ウイグル国)に言及する証言を引き合いに出さなければならない. P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*, Berlin 1985, Berliner Turfantexte XIII, Nr. 39 ; 更に同一著者 Titulaturen und Elogen uigurischer Könige, *Religious and Lay Symbolism in the Altaic World and Other Papers*, Wiesbaden 1989, p. 450 を参照.

(2) W. Samolin, *East Turkistan to the Twelfth Century*, Den Haag 1964. トルファン地域の専書としては, W. Fuchs, Das Turfan-Gebiet, seine äußeren Geschicke bis in die T'angzeit. *Ostasiatische Zeitschrift*, N. F. 3, Berlin 1926, pp. 124-166.

(3) A.v. Gabain, *Einführung in die Zentralasienkunde*, Darmstadt 1979, pp. 64ff.

(4) L. V. Dmitrieva, Drevneujgurskie materialy (ujgurskim pis'mom) v Institute Vostokovedenija AN SSSR, *Strany i narody Vostoka* 8, Moskva 1969, p. 226.

トルファン・敦煌の古代トルコ語文献の大部分は仏教テキストからなる. それらは, 大いに多様な仏教作品の存在を証言する. まだ決着がついてないが, いくつかの僧院には古代トルコ語仏教作品の大蔵経的全集があったかもしれない. 中国人の王延徳は 981 年に宋(960-1279)の使者として高昌を訪問したが, 彼の紀行に, 仏教についてこう書いている.「50 あまりの仏寺は, みな唐朝から賜った篇額があり, 寺内には仏教典籍の大蔵経, (漢語) 辞書の唐韻・玉篇・経音などの書物を有した.」[5]

疑いなく王延徳は仏教典籍(大蔵経)の名のもとに漢文経典の全集だと解した. そうでなければ, 書籍の文字・言語について所見を述べたであろう.

さてタリム地域のトルコ人が比較的速やかに成し遂げた文化変容の一つは,[6] 仏教の受容とその継承であって, 仏教はウイグル王国の精神的生活における決定的要素となったにちがいない. 仏教文献の網羅的な訳経活動の開花がその前提であり, また帰結でもある. この新しく作り出された書物の広がりと所在についてはテキスト残部自体といくつかの功徳記[7]を除いて史料が全く喪失してしまっている.

なおほかに触れておくべきことは, 突厥[8]・回鶻[9]の遊牧民族国家に由来する若干の史料及び彼らに関する中国人の報告書があり, 6 世紀以来すでに仏教はさまざまのなりゆき次第で彼らに受容されていた情報を含むのである. それにふさわしい中国史料の陳述に[10]ついてA. フォン・ガバインは, 論説「仏教のトルコ布教」(Buddhistische Türkenmission) においてまとめ論評した.[11] ここではただ, 仏教書の翻訳と伝播に直接かかわるその報告を復習することになる.

劉世清の伝記(6 世紀末[北斉書 20]) において 576 年頃のこととして報告されるが, 中国皇帝の命令によりこの外国語に精通した彼は, 突

(5)『宋史』(中華書局刊本, 北京)巻 490, p. 14112, *ll*. 1-2. cf. A. G. Maljavkin, *Materialy po istorii ujgurov v IX-XII vv.*, Novosibirsk 1974, p. 89.

(6) A.v. Gabain, Von Ötükän nach Idiqut-Šähri. Studie zur Akkulturation der Alt-Türken, AOH 36 [1982], pp. 183-196.

(7) F. W. K. Müller, Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden, APAW 1915, Nr. 3. 更に cf. L. Bazin, *Les calendriers turcs anciens et médiévaux*, Lille 1974, pp. 318ff(棒杭仏教碑文). Ş. Tekin, Die uigurische Weihin schrift eines buddhistischen Klosters aus den Jahren 767-780 in *Tuyoq*, UAJb 48 [1976], S. 225-230 (碑文の日付については疑問).

(8) S. G. Kljaštornyj - V. A. Lifšic, The Sogdian Inscription of Bugut Revised, AOH 26 [1972], pp. 69-102. このソグド語碑文は仏教に関する, 中国史料から知られる事実以前に対して, ただ僅かなニュースを保持する. cf. J. R. Roux, Les inscriptions de Bugut et de Tariyat sur la religion des Turcs, *Studia Turcologica Memoriae Alexxii Bombaci Dicata*, Napoli 1982, pp. 452-456. その特別な価値は中国史料の傍証にある.

(9) A. v. Gabain, Buddhistische Türkenmission, *Asiatica, F. Weller-Festschrift*, Leipzig 1954, S. 168f(カラバルガスン碑について). シネ-ウス, テルヒとテスのウイグル碑に仏教徒についての情報はない. cf. S. G. Kljaštornyj, Tësinskaja stela (predvaritel'naja publikacija), *Sovetskaja tjurkologija* 6 [1983], pp. 76-90 ; S. G. Kljaštornyj, The Terkhin Inscription. AOH 36 [1983], pp. 335-366.

(10)(東突厥について:) Liu Mau-tsai, *Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T'u-küe)*, I-II, Wiesbaden 1958, S. 461ff. (総合) ; (西突厥について:) A. v. Gabain, Türkenmission (註 9 みよ), p. 167 ; (ウイグル族の初期について:) A. v. Gabain, Die Frühgeschichte der Uiguren : 607-745. *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 72 [1952], S. 22.

(11) 註 9 参照.

厥カガンのタスパル(572-581)に贈呈すべく，涅槃経(Nirvāṇa-Sūtra) の突厥(トルコ)語訳を委任された.[12] この訳経はトルコ語のもっとも古いものと見なされるにちがいないが，遺憾ながら全く伝承されていない. すでにフォン・ガバイン[13]やルイ・バザン[14]も推測したように，訳述は，当時普及していたソグド文字によるものだったろう. しかも二，三の未発表写本断片であるが，大般涅槃経(Mahāparinirvāṇa-Sūtra)の古代トルコ語訳を，ベルリンのトルファン出土品コレクションから，私は確認しているが，とにかく確実なことは，上記の古訳とは全然無関係のものである.

もう一つ，これまでにも適切な注意が払われてきたが，ガンダーラ出身の僧侶，闍那崛多(Jinagupta：528-605) が中国からの帰途，574年，タスパル・カガンに招かれてトルコ(突厥)国内に滞在したことに関する.[15] 闍那崛多が翻訳や伝道の仕事を続けえたことは，明かにカガンにも好都合だったのであろう。彼は584年までそこに留まっているから，タスパルの後継者，ニヴァル・カガンも仏教への愛着を持ったと顧慮されうる.[16] 闍那崛多自身か，その側近の僧侶か，いずれかが仏教書の突厥語訳を行ったかどうかは定かでない. それに注釈すべきことはないが，僧侶たちが草原国家に10年あまり滞在して，手掛けた仕事が何よりもまず，インド・テキストの中国語訳を継続することだということはむしろ考えられる.

これらの事実から実際に翻訳された仏教テキストに関心がむけられよう. 同時に誰よって誰のために仏教書が作られたのかが，とくに問題として追求されなければならないし，それによって仏教がウイグル人にあってどのような役割を演じたかについて解明されうるのである.

この仏教文献の大部分は，多数の奥付詩作と同様に，モンゴル時代(13ー14 世紀)に作られたから，このテキストが一つの長い翻訳の鎖の末端だということを，当然無視するわけにはいかない. その際さしあたり重要なことは，モンゴル国においてウイグル人がどのような立場をとっていたかを，簡単な見取図のようにみることで，彼らは精神文化の多くの領域において案内役であり，指導者だったのである.

モンゴル族のうえに主権者となったテムジンの怒涛のような台頭，そして彼がチンギス・ハンに推挙されるに及んで，高昌(コーチョ)ウイグル王国の君主は，11ー12世紀にカラキタイのグルハンがベラサグンから中央アジアとタリム盆地の広域を支配していたそのカラキタイの後見から免れる時期がやってきたとみた. 1209年にイドゥック(ウイグル王)のバルチュク・アルト・テギンはカラキタイの代官を高昌において殺害させ，ほどなく新しい草原の君主の，(チンギスの)宗主権を承認したのである.[17] モンゴルの『秘史』によれば，ウイグル使節によって服属(の上奏)が述べられている.「雲は晴れて，母なる太陽を見たるごとく，氷が融けて，河の水を得たるがごとし. 私どもは大きな喜びをもっ

(12) Liu(註 10 みよ), p. 34.
(13) V. Gabain, Türkenmission (註 9 みよ), p. 164f.
(14) L. Bazin, Turcs et Sogdians : Les enseignement de l'inscription de Bugut (Mongolie), *Mélanges linguistiques offerts à Émile Benveniste*, Paris 1975, p. 44.
(15) Liu (註 10 みよ), p. 36f.
(16) Bazin,Turcs et Sogdiens (註 14 みよ), p. 43.
(17) Th. T. Allsen, The Yüan Dynasty and the Uighurs of Turfan in the 13th Century, *China among Equals. The Middle Kingdom and Its Neighbours, 10th-14th Centuries*, ed. M. Rossabi, Berkeley - Los Angeles - London 1983, pp. 246f.

て皇帝チンギスの御名と名声を拝聴しました. あなたさま, 皇帝チンギス陛下, ご慈悲を賜り, 黄金の飾り帯のとめがね, 深紅の上着の繕い布か何かを私めに見つけてくだされば, あなたさまの第五の息子となってお力添えをしましょう」と. この言葉をチンギス・ハンは慈悲深く受け入れ, 次のような知らせを使節に託してきた.「私はわが娘を与えよう. そして第五の息子としようぞ. イドゥックトはこちらへ来たれよ. 黄金と白銀, 大小の真珠やビロード, 緞子や絹織物をもたらせよ」と.[18]

しかしこの点について一致する中国とペルシアの史料の記述は, チンギス・ハンからウイグルへまず最初の使節が送られたとあり, より妥当といえる.[19] とにかくもバルチュク・アルト・テギンは彼の多かれ少なかれ自発的な服属によって彼の国家のために, (モンゴルへ)隷属した諸地域の仲間のうちで, 最高の地位をつねに確保した.『元史』の伝承によれば, 1270年にクビライが朝鮮の主権者(高麗の国王)に対して次のように確認した.「汝は後に服従したが故に, 諸王の間の低い席次におく. 我々太祖[チンギス・ハン]の治世にイドゥックトがまず服属した. それによって諸王間の先頭の席次に付けることを命ぜられた. アルスラン[カルルク王阿思蘭]は次に従った故に, 彼はイドゥックトより下の席次におかれた. 汝はこれを知らねばならない」.[20] 彼らの特権的地位の維持のためにウイグル人はいち早く兵役義務を果たさなければならなかった.[21] バルチュク・アルト・テギンとその後継者たちの忠実な服従のお蔭で, 高昌とビシュバリクのウイグル王国は半独立的地位を享受しえたのであり, それはなかんずく, 新しい文化的繁栄の開花をも促進したのであった.

チンギス・ハンからモンケ・ハンにいたるモンゴル帝国及びとりわけ元朝主権者(1260-1368)の行政のために不可欠の能力は, 第一に「色目人」(中国語:[特別な]色合いの人々の意)のなかから,[22]また一括して呼ばれた西・中央アジア諸民族のなかから, 徴募された. トルコ語を話す民族からの代表者が重要な座席を占めた. つまり「これらの外国人植民者の間で, アジアの各地からのトルコ人, コーカサスからのアラン人, アルメニア人, チベット人, ペルシア人とアラブ人, そしてほんの僅かのフランク人(即ちヨーロッパ人)の中にあってトルコ族は, ひときわ目立つ存在であったし, 我々の注意を引くのである. 彼らは問題なくもっとも影響力の大きなグループであり, それは文化的にも政治的にもそうであった. 時には彼らはモンゴル宮廷の内輪事においても活発な役割を果たし, 直接に王朝の行く末を左右することもあった」と.[23] ド・ラヘウィルツの陳述[24]によれば, ト

(18) E. Haenisch, *Die Geheime Geschichte der Mongolen*. Leipzig 1948, S. 112. I. de Rachewiltz による新訳: The Secret History of the Mongols, Chapter Ten. *Papers of Far Eastern History,* 26, September 1982, p. 43. 更に cf. P. Ratchnevsky, *Činggis-Khan. Sein Leben und Wirken*, Wiesbaden 1983, p. 92f.

(19) Allsen (註 17 みよ), p. 271, n. 22.

(20)『元史』(中華書局刊本, 北京 1976)巻 7 :218. Allsen による翻訳(註 17 みよ), p. 247.

(21) M. Kutlukov, Mongol'skoe gospodstvo v Vostočnom Turkestane, *Tataro-Mongoly v Azii i Evrope*, Moskva 1970, pp. 86f.

(22) H. Franke - R. Trauzettel, Das Chinesische Kaiserreich, *Fischer Weltgeschichte,* 19. Frankfurt am Main 1968, p. 230. また cf. M. Rossabi, The Muslims in the Early Yüan Dynasty, *China under Mongol Rule*, ed. J. Langlois, Princeton 1981, pp. 259, 273 ; I. de Rachewiltz, Turks in China under the Mongols : Preliminary Investigation of Turco-Mongol Relations in the 13th and 14th Centuries, *China among Equals*, pp. 288, 303 (n. 45).

(23) De Rachewiltz, Turks in China (註 22 みよ), p. 281.

(24) De Rachewiltz, Turks in China (註 22 みよ), p. 285.

ルコ族のなかでもウイグル人が最高位を占めていた. さまざまな国家的部門における945人の官僚(ダルガチ)のうち, 皇室の顧問や書記, 地方の官吏または裁判官に469人のウイグル人がいた. 有名な学者や書道家も多く, また翰林院(1264年)の復興以来, この重要な学者の共同体組織の成員にウイグル人も多かった. このグループは, 我々が本論で検討する対象でもあるが, また文化の発展に対する彼らの役割について, ド・ラヘウィルツが次のようにたいへん適切に特徴付けている.「クビライの時代に, そして後の元朝期においてウイグル人たちはモンゴル族の文化的よき師匠であり続けた. もっともチベット・ラマとはこの役割を今やわかちあわねばならなかったし, ごく小数ながら儒者とも競合した. ウイグル人のモンゴル支配者との関係は古典的共生関係であった. 彼らは主人のために基本的政治・行政・経済, また文化的活動を行い, 返礼に保護や物質的利益をうけた」と.[25] 最後にわずかに述べることがあるとすれば, 一連の西・中央アジア出身者は, ウイグル人もそのなかにあって, 完全に中国人に同化してしまったと, 陳垣が広範な調査において指摘したことであろう.[26] 時には中国人以上に中国語の使い手であったことを, ウイグル人のセヴィンチ・カヤ(小雲石海涯:1286-1324)の経歴が示す. 彼は中国風に,「貫雲石」の名前を当てられた. 1314年かその少し後, 彼は皇帝仁宗(Buyantu : 1312-1320)に, 疏条六事を献呈し, そのなかで彼は正統的儒教の統治原理を進言した. 疏事の詳細は失われるが, 六事の主題のみは石碑に記録された.[27] リン氏が強調しているように, 一中国人があえてそのような膨大な疏条をモンゴル皇帝に提出したかどうかは疑わしい.[28]

モンゴル時代の傑出した若干の人物に関する個別の研究を除けば,[29] 中央アジア人の諸活動の研究はほとんど手がつけられていない.[30] 中国語史料にもとづいてこの問題を解決するには, イスラムの, とくに重要なペルシア語の史書の陳述によって補完されて決定的進捗がなされるし,「元朝文献目録プロジェクト」によっても同様に期待される.[31]

モンゴル帝国において活躍していたウイグル人の生活や活動の解明に, ウイグル・テキストそのものが寄与するものかどうか問題である. もちろんごくつつましやかに, それは肯定される. トルファンや敦煌に保持されたウイグル文献類はほとんどが仏教的作品からなるので, 仏教的活動に関するその種の情報に限定される. このウイグル訳経に関する陳述は, これまで中国の史料には収録されていないもので

(25) De Rachewiltz, Turks in China (註 22 みよ), pp. 294f.

(26) 陳垣(Ch'ên Yüan), *Western and Central Asians in China under the Mongols*, Los Angeles 1966. また cf. L. C. Goodrich, Westerners and Central Asians in Yuan China, *Oriente Poliano. Studi e conferenze tenute all'Is. M. E. O. in occasione del VII centenario della nascita di Marco Polo (1254-1954)*, Rom 1957, pp. 1-21.

(27) R. J. Lynn, A Poet and His Poems : 貫雲石(1286-1324), *Papers of Far Eastern History*, 18 September 1978, p. 90ff.

(28) Lynn (註 27 みよ), pp. 91-92.

(29) Cf. de Rachewiltz, Turks in China(註 22 みよ)に挙げられた著作. B. Ögel, *Sino-Turcica*, Taipei 1964 で言及されたものなどにより補完されたい.

(30) なお J. W. Dardess, Conquerors and Confucians. *Aspects of Political Change in Late Yüan China*, New York and London 1973 などをみよ. そこには元朝後期における中央アジアの儒教化が関説されている.

(31) 3冊の索引稿本がすでに出版されている. I. de Rachewiltz - M. Nakano : Index to Biographical Material in China and Yüan Literary Works, First Series, Canberra 1970 ; Second Series (I de Rachewiltz - M. Wang), Canberra 1972 ; Third Series, Canberra 1979.

あり, 訳経の後がき部分であったり, まれには序言のなかに含まれる.

ウイグル人の仏教文献

この章であらかじめ, ウイグル人の仏教文献に関して二三の所見を述べておきたい. 前モンゴル期(9－12 世紀)とモンゴル期(13－14世紀)に分けることを提案する. マニ教徒と同様に仏教徒も熱心な訳経事業を実行した. これは寺院における必要をみたすためと, また大衆の間の仏教教義の伝道にも役立つはずであった. しかしこの訳経事業の始まりは明かでない. なぜならば, もっとも早い時期の訳経は, それに続く数世紀間に広く変化なく行われた文章語で書かれたからである. 第二段階にいたり, はじめて文法形態と文章法にいくつかの特徴が指摘できるようになる.[32] もっとも早い仏教用語の分析に基づいて, フォン・ガバインは, もっとも古い教師はソグド人であったという結論に達している[33]が, しかしソグド語から翻訳されたと確実にみなしうる何らのテキストもまだ, これまでにまったく確認されていない.[34] 年代的順序においては, 概して次のような出典言語が問題となる. すなわちトカラ語, 中国語, チベット語である. そしておそらく次の段階にまずサンスクリット語が来る.

このような年代的順位による発展段階ではなく, そのときどきの実例によって証明されうるもので, 次のような適応段階による区分を行うことは可能である.

1. 仏教作品はウイグル人によって, ある種の“寺院言語”で読まれた. 二三の場合に, そのような読誦者は書き込みを残している. 例えば, 中国語の『増壱阿含経』(Ekottarāgama) 本の裏面に(ウイグル語で)こうある.「私のもっとも高貴なる*Lisön* 師の幸福のために, 私, Tolu Tutung Qya はこの『増壱阿含』を恭しく読誦した. 仏陀に帰依する, 法に帰依する, 僧伽に帰依する」.[35]

2. 外国語の手本がウイグル人によって書写された. ウイグル人の写経者の奥付が知られるのは,『能断金剛般若波羅蜜多経』(Vajracchedikā-sūtra)のソグド訳本である.「自分の手でクトゥルグ(Qutluγ)は書いた」とある.[36] もっとも, ソグド語プラセナジット写本断片の場合におけるように, テキスト裏面の覚書であるとき, それをウイグル人の写経者が本当に外国語テキストであると思っていたかどうか, 定かではない.[37]

(32) 文法形態論に関するが, 所有接尾辞のない名詞に対格接尾辞{nI}が頻出する. 文章論の分野では(第1期に対して)名詞構文の新様式(2番目の語句[被修飾語]に第3人称所有接尾辞が欠落する)が起こり, 正字法では歯音における字形的変化の消滅である. Cf. P. Zieme - G. Kara, *Ein uigurisches Totenbuch, Nāropas Lehre in uigurischer Übersetzung von vier tibetischen Traktaten nach der Sammelhandschrift aus Dunhuang British Museum Or. 8212 (109),* Budapest, pp. 11ff.

(33) V. Gabain, Leben (註1みよ), p. 25 ; Iranische Elemente im zentral- und ostasiatischen Volksglauben, *Studia Orientalia,* 47, Helsinki 1974, p. 59.

(34) J. P. Asmussen, Die Iranier in Zentralasien. Kultur- und religionshistorische Bemerkungen, *Acta Orientalia* (Havn.), 27 [1963], p. 125. なお D. Maue - K. Röhrborn, Zur alttürkischen Version des Saddharmapuṇḍarīka-Sūtra, *Central Asiatic Journal,* 24 [1980], p. 253. も可能性を考慮する.

(35) K. Kudara - P. Zieme, Uigurische Āgama-Fragmente (1), AoF 10 (1983), p. 270.

(36) F. W. K. Müller - W. Lentz, Soghdische Texte II, SPAW 1934, p. 548.

(37) *ibid.*

３. ある種の “寺院言語” でテキストの読み写しが見事な書体で行われたものがある. それはマニ教の中世ペルシア語断片が古代トルコ語のルーン文字[38]で書かれた例である. その際アルファベット対応表が示されたことは注目に値する.[39] 仏教本の伝承の枠組のなかで, 類似の様式が取り入れられたものがある. 第一に, ダラニ(呪文)に言及すべきであり, もとのインド語音がそのままの条件で保存された.[40] しかしまた(同じ呪文が)他のテキストでは音訳されている. ウイグル人によって, 中国語またはインド語の作品がウイグル文字によって書写された写本も行われたが, 後者(インド語)の場合にはウイグルの発音方式に依存した書法によって行間にブラーフミー音訳が付せられた場合も, しばしば見られる. これが非常によく保存されたものにセンギムで発見された『文殊師利名等誦』(Mañjuśrīnāmasaṃgīti)[41]の刻本がある. いくつかの小断片であるが, チベット語テキストがウイグル文字で書かれたものも発見されている.[42]

４. もとの語音を保持しながら単語ないし文節の対語訳によって, 新しい性質の応用が達成されたものがある. 中国語とウイグル本の阿含経テキスト[43]あるいは蛇呪術を扱う『マイトリー経(Maitrīsūtra)』[44]がその実例として挙げられる.

５. もっとも高度で, かつ新しい宗教共同体のためにもっとも重要な同化様式は, 当然純粋な訳述である. 訳経事業は言語を豊かにすることについては, フォン・ガバインが示唆する.[45] 仏教寺院は, しかもそれがもっとも早くに訳者の活動場所となったことを許し, この点において, 中世ヨーロッパのキリスト教修道院と同様に重要な役割を演じた.

訳経は, 仏教文献のもっとも広範なかつ重要な部分をなしているので, 我々は, さしあたりトルファン・敦煌出土品の周知のものについて, 短い展望を与えたい.[46] もっともこの枠組では, 全てのテキストに関して詳しく批評することは不可能である. 私の選択は, 一つには, さ

(38) A. v. Le Coq, Köktürkisches aus Turfan, SPAW 1909, p. 1052ff.
(39) Le Coq, Köktürkisches(註 38 みよ), pp. 1049-1050.
(40) C. Oetke, *Die aus dem Chinesischen übersetzten tibetischen Version des Suvarṇaprabhāsasūtra*, Wiesbaden 1977, S. 58ff. (“dhāraṇī-Transkription”).
(41) Cf. G. Kara, Weiteres über die uigurische Nāmasaṃgīti, AoF VIII [1981], p. 233.
(42) G. Kara,Uiguro-Tibetica, *Proceedings of the Csoma de Kőrös Memorial Symposium*, held at Mátrafüd, Hungary, 24-30 September 1976, Budapest 1978, pp. 164-167. ベルリンのトルファン収集品のもう一つの断片が G. カラによって刊行されている.
(43) 庄垣内正弘『ウイグル語・ウイグル語文献の研究』I, 神戸 1982, p. 94 による概要は, ストックホルム・テキスト(cf. K. Kudara, A Provisional Catalogue of Uighur Manuscripts Preserved at the Ethnographical Museum of Sweden, Ms. 1980)とベルリン断片(cf. 註 35)によって補完される.
(44) P. Zieme, Indischer Schlangenzauber in uigurischer Überlieferung, *Tibetan and Buddhist Studies. Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Kőrös*, hrsg. von L. Ligeti, Budapest 1984, Bd. 2, S. 425-440.
(45) A. v. Gabain, Die alttürkische Literatur, *Philologiae Turcicae Fundamenta* II, Wiesbaden 1964, S. 221.
(46) A. v. Gabain の概観(cf. 註 45 など)以外, cf. Ş. Tekin, Uygur edebiyatının meseleleri, *Türk Kültürü Araştırmaları* II [1965], pp. 26-67. 考慮に入れるべきは依然としてまだ, D. Sinor, A középázsiai török buddhizmusról, *Kőrösi Csoma Archívum*, I. Ergänzungsband 1939, pp. 353-396. さしあたり, cf. W. Scharlipp, Kurzer Überblick über die buddhistische Literatur der Türken, *Materialia Turcica* 6 [1980], S. 37-53. タリム地

まざまな文献伝達の様態を明かにすることであろうし, 他方では, 中国語によって刻印された大乗仏教の二三の重要作品で, 量的にも十分にしかも質的にもふさわしく古代トルコ語へ伝承されたもの, または仏教の発展に特に意義があったものについて紹介しようとするものである. ふさわしい研究がほとんど欠如している訳経方法の諸問題についてはただ触れるだけである.[47] 古代トルコ語仏教の評価のために確実なことは, その成果を引き出すべく有益となる, テキストからテキストへ手掛けなければならない個々の労作である.

中央アジア仏教の流れ

古代トルコ語仏教文献の, うたがいなく最古期の層は, その奥付に従えば, トクリ語(トカラ語A)から翻訳されたテキストである. トカラ語は, 一方にクチャ, 他方にアグニ／カラシャール(とトルファン)の主たる方言を持つが, それにしてもまず, トルファン出土本からこの言語の解明がなされた. トカラ語は, インド語(まずもってサンスクリット語, しかしGāndhārī-Prakritもある), サカ語とソグド語に並んで, タリム盆地の前トルコ期において, 仏教伝達のために意義深い役割を演じた.[48] すでにトカラ人自身, ソグド人と同様に, 仏教の二次的伝達の代表者であったが, トカラ人は, 古代トルコ人が中国仏教徒の影響下に入るに先だって, 彼らへの仏教のもっとも重要な仲介者となったのである.

初期の重要な作品(後章, 日付の項をみよ)はマイトリシミト(Maitrisimit)であり, 数々の写本の残簡となって伝達されている.[49] その題名は, サンスクリットのマイトレヤサミティ(Maitreyasamiti,「弥勒との邂逅」)にさかのぼるが, テキストの要旨もすでに概説されて, 中央アジアの弥勒崇拝の発生または開花と関連づけられている.[50] 弥勒は未来仏であり, 兜率天より降来し大般涅槃まで到達したことが古代トルコ語本では 27 章の広範な作品に叙述された. ミュラーによって後記部分であるとされ, フォン・ガバインとシナーシ・テキンはそうでなく[50a]前言に由来したとみる写本断片の一枚に次のような要旨がテキスト自体の中にみつかる.「27章からなる(広範な)大教書で, たとえば, この天神たる仏陀が三阿僧祇(ン無限時間)と百大劫において, (徳性の習得に)精進したことを, 兜率天より下降し(人間の)世界をとらえて生まれたもうたこと, あるいは出家して６年ターパヴァナ林において苦行したこと, あるいは金剛座に就いて四重の魔軍に打ち勝ち, そして無等の仏果を得たこと, あるいは法輪を転じて５僧と８万の諸天が解放されたこと, あるいはそれから十五阿僧祇の那由多(nayuta : 無限時間)にわたる数の得度した衆生を解放すべく召

域の仏教文学に関する総覧は, いずれの言語でも, L. Sander, Buddhist Literature in Central Asia, *Encyclopaedia of Buddhism* IV, 1. Sri Lanka 1979, pp. 52b-75b.

(47) 仏教テキストの偈文部分は私の調査がある. Cf. P. Zieme, *Die Stabreimtexte der Uiguren von Turfan und Dunhuang. Studien zur alttürkischen Dichtung*, Budapest 1991, S. 48ff.

(48) 中央アジア言語の相互依存や影響の若干の問題については, 論集：*Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*. Vorträge des Hamburger Symposions vom 2. Juli bis 5. juli 1981, hrsg. von K. Röhrborn und W. Veenker, Wiesbaden 1983.

(49) ベルリン収集品断片は, Ş. Tekin, *Maitrisimit nom bitig*, 1-2, Berlin 1980, Berliner Turfantexte IX.

(50) A. v. Gabain, *Maitrisimit*. Faksimile der alttürkischen Version eines Werkes der buddhistischen Vaibhāşika-Schule [I], Wiesbaden 1967, II Berlin 1961, Beiheft [I], S. 22ff., Beiheft II, p. 20ff.

(50a) Cf. 註 362.

されて, クシナガラ城市の近くにある娑羅林において, 大般涅槃に入りたもうことまで, あらゆる諸事について教える」[51]ものである. その作品は, トカラ語先行本が「戯曲」として脚色されたが, フォン・ガバイン[52]とボンバチ[53]によれば, それと同じか, または類似の伝本が大道芸人的様式の舞台装置で上演するための脚本として役だったのである.

最近この作品の古代トルコ語と同様に, トカラ語の写本もさらに収集されたことから, [54] その公刊が丁度はじめて始まったところであり, トカラ語先行本とその古代トルコ語との対訳関係の最終的評価が早まることになった. [54a] 問題点はトカラ語テキストから“翻訳” されたという, 古代トルコ語奥付の陳述が適切なものであるかどうかである. 今日すでに見ることができる限りでは, 差異の生じた形が対照される. 若干の部分は, 全く “翻訳” されたものにみえるが, 他のところでは内容的に同一のものであるにすぎない. この課題の研究は残る全ての有効な資料の基礎的分析に待たなければならない. その成果はトルファンの仏教伝道について疑いのない重要な解明をもたらすであろう.

マイトリシミト訳本の成立年代について, その奥付は遺憾ながら, なにも伝えていない. テキストのもっとも古い写本が少なくとも西暦８世紀の年代におかれるべきだという[55]シナーシ・テキンの議論に, 私は従うことはできない. 彼は, ある書写人の奥付における師匠 (*kšy ’’č’ry*) *Kl'np'try* (シナーシ・テキンによれば, サンスクリット語 Kalyāṇabhadra, ただしむしろおそらくKalanabhadra?)[56]に言及し, その人物を, シナーシ・テキンは「棒杭文書」[57]に再度見出されると信じた。しかしそこでは名前のはじめの部分だけがはっきり読み取れるに過ぎず, したがって不確かな後の部分の名前の同一性, さらに人物の同一性についてはなおさらのことである. この棒杭文書は, なおかつ, ミュラーのより早い時期の立論に反して, 10 世紀末から 11 世紀初めに属するということから, 名前と人物が同一であるべきであった場合には. [58]

早期の日付そのものが外れてしまう. その結果として, マイトリシミトの書写は「９世紀」に

(51) F. W. K. Müller - E. Sieg, Maitrisimit und “Tocharisch” , SPAW 1916, p. 412.

(52) V. Gabain, Beiheft II (註 50みよ), pp. 18-19. とくに S. 19 :「我々の古代トルコ語本マイトリシミトは, (戯曲における時と)その場所の一致そしてその表示によって一つの*körünč*(見せ物)として, そのテキストがさまざまの個人によって朗読され, また更に図解された絵が掛けられたことを我々にも思い浮かばせる程のものである」と.

(53) A. Bombaci, On Ancient Turkish Dramatic Performances, *Aspects of Altaic Civilization*, Bloomington - Den Haag 1963, pp. 92f.

(54) Geng Shimin, Qädimqi Uygurcä iptidayi drama piyesasi “Maitrisimit”(Hami nushasi)ning 2-pärdäsi häqqidiki tätqiqat, *Journal of Turkish Studies* 4 [1980], pp. 101-156. ハミ写本の続章の刊行が進行中である. 状況については, cf. J. P. Laut, Bemerkungen zu den jüngsten Editionen der Hami-Handschrift der Maitrisimit, UAJb N.F. 9 [1989], pp. 174-183.

(54a) さしあたり, cf. W. Thomas, Tocharische Maitreya-Parallelen aus Hami, *Sitzungsber. d.Wiss.Gesellschaft an der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main*, Bd. XXVII, Nr. 1, Stuttgart 1990.

(55)BT IX(註 49 みよ), Bd. 1, pp. 8-9.

(56) K. Röhrborn, Uigurisches Wörterbuch, Wiesbaden 1977 (ff.), S. 39b “Kalnapatre(?)”と読む.

(57) Müller, Pfahlinschriften (註 7 みよ), p. 23, *l.* 18.

(58) Bazin, *Les calendriers*(註 7 みよ), pp. 318ff(棒杭仏教碑文); 森安孝夫「ウイグルと敦煌」『講座敦煌』巻２(敦煌の歴史), 東京 1980, pp. 335, 337.

成立したという，フォン・ガバインのより控え目の断定に従うのが得策となる．[59)]

作品のいくつかの章はたいへん強烈な地獄の姿を描写する．そこでは人間がその悪業に基づき繰り返し生み出される．たとえばいかにこのテキストがこのところで寺院の有形の保護を尊重しているかは，次の引用が示すであろう．（二三の地獄のいきものが弥勒仏に近づいて語りかけて，）「わが仏陀よ，我々がかつて人間の世界にあったとき，我々は王侯貴族であったが，権力によって寺院に所属する財産を強奪し，また内密に盗んだのだ」[60)]と．この文節から具体的状況を引きだすべき何らの関心事がないにしても，国家と，寺院によって代表される宗教的な力との闘争で露出した事件がその基礎になりうる．しかも当然，この章は，地獄の断罪という脅迫によって俗人の信心深さを促進するように仕向ける．中央アジアにおける懺悔の確立は強く弥勒崇拝と結びついていたことを，フォン・ガバインは明かにした．[61)]

マイトリシミトの奥付は，我々にはもはや手に入らないサンスクリット原典を暗示する一方で，おそらく，同様にトカラ語から古代トルコ語に翻訳されたもう一つの作品の場合にはそのような先行本はまったく現存していない．この作品が『十業道譬喩鬘』（Daśakarmapathāvadānamālā）という題名の説話集である．[62)] 奥付によれば，テキストはキュセン（クチャ）語（トカラ語Ｂ）からトクリ語（トカラ語Ａ）に，それからトルコ語へ訳された．[63)] おそらく十業道にふさわしい物語が集成されたものである．「業道」（karmapatha）は人に十の善行を成し遂げさせ，身（殺生・偸盗・邪淫），口（妄語・両舌・悪口・倚語），意（貪欲・瞋恚・邪見）によって犯

(59) V. Gabain, Beiheft I（註 50 みよ）, p. 27.

(60) BT IX（註 49 みよ）, Bd. 1, S. 189, cf. P. Zieme, Uigurische Steuerbefreiungsurkunden für buddhistische Klöster, AoF VIII [1980], S. 238.

(61) V. Gabain, Beiheft II（註 50 みよ）, pp. 21-23.（在俗者の懺悔と弥勒崇拝）

(62) F. W. K. Müller, Uigurica III. Uigurische Avadāna-Bruchstücke, APAW 1920, Nr. 2, p. 3（そこではまだ誤って：Daśakarmabuddhaavadānamālā）; 同著者, Uigurica IV, hrsg. von A. v. Gabain, SPAW 1931, pp. 675-727, p. 679 の題名に：Daśakarmapathaaavadānamālā. さしあたり, cf. J. P. Laut, Zwei Fragmente eines Höllenkapitels der uigurischen Daśakarmapathāvadānamālā, UAJb N.F. 4 [1984], S. 118-133 ; G. Ehlers, *Alttürkische Handschriften*, Teil 2: Das Goldglanzsūtra und der buddhistische Legendenzyklus Daśakarmapathāvadānamālā, Stuttgart 1987.

(63) U IV（註 62 みよ）, p. 678f. に発表された識語断片に，もう一つ付け加えることができる．Minz 864a: (1) **waiba**žiki šastra dantri **kavidrri**(?) (2) **sanga**tazi ugu: küšän tilintin (3) **to**xrï tilinčä ävirmiš: t**oxr**ï (4) **tilin**tin šilazin pr**aštinki** b**axšï** (5) yangïrtï türk-čä ä**virmiš** (6) bo dšakrmapata**avdanamal** (7) uluγ kavi nom bitigdä **on** (8) krmpat-larïγ ä**rtmäkning münin** (9) **qa**daγïn : küzä**dmäkning asïγ** (10)-**ïn**] tusu-sïn körk**itmäkdä** (11) **irig** sarsïγ sav sözlä**mäkig** (12) **yirmäk atlγ tägzin**č「毘婆沙師（vaibhāṣika : 註釈家）であり，論（śastra）・教義（tantra）・作詩（kāvya）の精通者たる（？）サンガダーサ（Saṃghadāsa）がウグ・キュセン語からトクリ語へ訳したる，トクリ語から，シーラセナ（Śīlasena），*Praštinki* 師が新たにトルコ語へ訳したる，この『十業道譬喩鬘』大詩書における十業道を犯すの罪過（から身を）護ることの利益を示すことによって厚顔な恥知らずの言葉を話すことを嫌うと名付ける巻」．数語，なかんずくこの文節の称号や名前は，まだ相変わらず難解さを蔵し，この部分についての論議を断念せざるを得ないほどである．だが私は，ウイグル語 *twxry* がトカラの古い同名辞であることに関説しえよう．今やこのウイグル名辞が玄奘三蔵伝に見える漢語「覩貨邏」の訳語となっていることによって，その確認が得られたのである．Cf. L. Ju. Tuguševa, *Fragmenty ujgurskoj versii biografii Sjuan'-Czana*, Moskva 1980, 15a7.

す十の悪業を回避する道である」[64] これに関連してソグド語断片にも示唆がある. 作品の題目 δ*s'šyr'krtyb*(十善行)がみえていることだ[65]が, もしかしたらその際, 類似の作品が問題になるかもしれない.

たしかにウイグル語の説話に目を向けると, フォン・ガバインが指摘したように, 人物はいつも類型的である. たとえば, 王は最高の施主であり, 僧は導師であり, 大臣は必ず王の意に従うものの一人としてある. にもかかわらず, 内容の個々にわたり表現力を感知でき, 言葉がたいへんにいきいきして, 時には劇的でさえある. [66]

(64) J. Nobel, *Suvarṇaprabhāsottamasūtra*. Das Goldglanz-Sūtra, Ein Sanskrittext des Mahāyāna-Buddhismus, Erster Band: I-Tsing's chinesische Version und ihre tibetische Übersetzung, Leiden 1958, p. 86, Anm. 4.

(65) W. B. Hening, The Name of the "Tokharian" Language, AM N.S. 1 [1949], p. 160, n. 2.

(66) V. Gabain, Die alttürkische Literatur(註 45 みよ), p. 222.

謝辞:本訳文の草稿について, 本学 小西真弓助教授より, 原著と対照して詳しく点検をいただき, 多くの修正を得たことを記して感謝の意を表す.